

# 日本名婦伝

静御前

吉川英治

青空文庫



義経よしつねはもろ肌を脱いで、小冠者こかんじやに、背なかの灸きゆうをすえさせ  
ていた。

やや離れて、広縁をうしろにし、じつと、先刻さつきから手をつかえ  
ているのは、夫おくがた人の静しずかの前まえであつた。

八月の真昼である。

六条室町むろまちの町中とは思えぬほど、館やかたは木々に囲まれている。  
照り映える青葉の色と匂いに室内も染りそうだった。

——が、静しずかにとって、気になるのは、二十九という良人の若い

肉体まで、そのせいか翡翠ひすいを削けずつたように蒼あおく見えることだった。

「……………」

蝉せみの声ばかりであった。小冠者は細心に、主君の肌へ火を点じ

ていた。

義経は、熱いともいわず、身もだえ一つしなかつた。けれど、  
見ている静のほうが、その一火一火ひとひとに、骨のしんまで灸やかれるよ  
うな慄こらえに締めつけられていた。

（——お熱くはないのかしら）

と疑うように、小冠者はそつと、主君の肩ごしにその顔をのぞ  
いてみた。

やはり彼とて熱いには違いない。義経は、眼をふさぎ、奥歯を

かんで、鼻腔びこうでつよい息をしていた。

——と。ふいに、義経は、

「静しずか」

と振向いて、さつきから返辞を待っている妻へ、こう云った。

「通せ、景季かげすえを。——会つてやろう」

「えつ……。では、お心を取直して」

「そなたにも、また家臣たちにも、そう心配かけてはすむまい。

……今は何事も忍にんの一字が護符ごふよ。この九郎さえ忍びきればお許ことらの心も休まろう。——通せ、ここでよい。義経が仮病けびょうでないことも、景季の眼に見せてくりよう」

## 二

宇治川の合戦に、名馬摺墨するすみに乗って聞えを取り、その後、頼よりとも朝にもお覚えおぼのよい梶原景季であつた。

その頃は、義経の幕下であつたが、今日は、鎌倉殿の権力を、背に負っている使者で来たのである。

「異いな臭い……。これはまた、何のけむりか」

景季は、そこへ坐るなり、天井を見まわして、訊ねた。義経は、脇きょう息そくに倚よつて、苦笑しながら、灸きゆうをややいていたところ故と答えると、

「そうそう、先頃から、何度訪ね申しても、御病中とのみで、追

い返されたが——時に、御容態はいかがでござりますな」

「景季。おん身は、義経が会わぬのは、仮病ならんと、家人けにんへ云われたそうなが、篤とくと、この灸あしの痕を見られよ」

と、襟えりをはだけて示し、

「兄頼朝へ、其方どものそうした邪推や偏見を、そのまま伝えてくるるなよ、先にも義経は、兄上のおひがみや誤解を解こうものと、病軀びょうくを押し下つたが、腰越こしこえにて阻はばめられ、遂に、鎌倉へ入るも許させ給わず、空しく京へ立ち戻つて来たが……骨肉の兄と弟とが、かく心にもなく隔へだてられ、浅ましい相剋そうこくの火を散らすことよと、世間の眼にも見らるる辛つらさ。……景季かげすえ、おぬしら、臣下の者にも分ろうが」

義経は、彼の姿を見ると、云わずにいられなかつた。情熱に生き情熱に戦つて来た彼は今——平家の旧勢力を一掃して、源氏という、また、鎌倉幕府という新しい組織の段階に入つてくると、もうその役割のすんだ無用の破壊者の如く扱われて、ことごとくに兄頼朝からは疎うとんぜられ、幕府の一部からは曲解をうけた。

——心外な！

彼はまたそれを、情熱の焰につつんで深刻に悩むのだった。武人の働きや武略を必要とした世情は一転して——新しい段階では、政略家が舞台にのぼり、政治的な整理や工作が、何もかも無視して働いているのだ——というふうに冷然と見ていることができなかつた。



また、幕府を繞る北条閥めくや大江広元ぼつなどの、いわゆる政治家肌な人たちの中では、義経が、戦時同様な威力をもつて、京都守護の任にあることは、何かにつけ都合が悪かった。殊に、後白河法皇の御信任は日に厚く、九条兼実かねざねなども、義経を無二の者としている傾きがある。——頼朝の心もまた、それには穏やかであり得なかつた。

「いや、お暑い折を、押してお目通りを願ひ、恐縮でした。幕府の使いとしてなれば、御ゆるしにあずかりたい」

景季は、わざと、義経のことばをそらして、威儀いぎ作つた。

「早速ですが、かねて頼朝よりとも公から、貴方へ御内命のあつた一儀、何故の御延引かと、お怒りでござる。一体、いつお討果しになる

お心か、確しかと、その儀を伺いに参つた。御返答を賜りたい」

「新しんぐうの宮ろうゆきいえ十郎行家どのを、討てとの、仰せつけのことであるか」

「そうです」

「行家どのは、兄頼朝にとつても、この義経にも、叔父御おじごにあたるお人であろうが」

「おことばまでもありません」

「しかも、平家追討の折には、河内より兵を引つ提さげられ、撰津せつつでは、軍船や糧ろうまい米を奉行せられ、勲功もあるお人」

「しかし、鎌倉殿には、忠誠ではありません。頼朝公を甥おいと侮あなどられ、根が、木曾殿の幕下にあつたお方だけに」

「理窟は待て。兄上には、すでに、佐々木定綱に命じて、行家どのを討てとおいいつけなされたそうだが、義経は、情において、叔父御を討つに忍びない。——そういう兵馬は義経の旗下きかにはない」

「噂には、あなたが、行家殿を匿かくまつておられるとも聞きますが」  
「知らぬ。あのお方とて、犬死はしとうあるまい。隠れるのは当り前じゃ」

「では、鎌倉殿の仇を庇かくまわれて、御命に叛そむかるるお考えか」

「たれが」

「あなた様が」

「ばかつ。——疾とく、帰れつ」

## 三

物蔭に聞いていた家臣は胆きもを冷やした。簾の蔭に案じていた静しずかもハツとした。情熱の病人は、遂に、烈火のかたまりを、景季かげすえへ吐きつけてしまった。

こんな結果になるなら、むしろ仮病と取られても、使者の景季にお会いさせなかつたほうがましであつたものをと、家臣たちは悔いたが、及ばなかつた。憤然と立帰つた景季は、即日、六条油小路の旅舎を引払つて、鎌倉へ急ぎ帰つて行つたという。

「さばさばした。これで、一夕立そそいで来れば、なお、清すがすが々が

しかろう。——静、雑色ぞうしきに命じて、庭木へ水を打たせい。灯ともしたらまた、そなたの鼓つづみなど聞こうほどに」

義経は、夕迫る縁に立って、崩れる雲の峰を見ていた。

「はい」

彼の妻は、まだ十九だった。

十五、神泉殿の舞楽の日に、初めて義経おもに想われた。恋を知つた十六の春と共に、眉を改めて、白拍子しらびょうしの群れから去り、その細い腕かいなで養つて来た母の磯いその禪師ぜんじと一緒に、この館やかたへ移つた静であつた。

晴れがましく輿入れした妻ではない。それだけに、妻たる女の眞実を、彼女は、良人へも召使にも、無言の眞心で示して来た。

よしや鎌倉にある良人の兄君からは、まだ一片の便りにも「弟の妻」とゆるされた例はなくても、彼女の心には、何の不足でもなかつた。

## 四

鎌倉に帰つた梶原景季は、頼朝へ、こう復命した。

「判官ほんがん殿には、病中と仰せあつて、なかなかお会い下さいません。遂に、強たつて御威光を以て、お目通りしましたところ、灸きゆうなどすえておられ、御顔色も憔しやうすい悴せいの態に見うけられました。が、一日食わず、一夜眠らず、灸などすえれば、病態は作られます。

——行家追討の御錠ごじょうについては、耳もかさねず、疾く帰れとの御一言あつたのみ、取りつく島もなく立戻りました」  
それからまた、都での風聞ふうぶんとして、義経の行装の豪華、禁中の羽振り、日常の花奢かしやなど、問われないことまで告げた。

「そんな態か」

頼朝の顔いろは動いた。

「仙洞せんとうの御気色みけしきに諂へつらい、武功に誇り、頼朝にも計らわず、五位じょうの尉じょうに昇るなど、身のほどを忘れた振舞、肉親とて、捨ておいては、覇業の障さわりになる。今のうちに、九郎冠者くわんしやめを討つて取れ」  
下知げちは、武府に伝えられた。

和田、三浦、千葉、佐々木など、誰もその討手は辞退した。土と

佐房昌俊さのぼうしゅうしゆんに命が下つた。昌俊は、部下の藍沢次郎あいざわじろう、真門まかど太郎など八十余騎をひいて、京都へ馳せ上つた。

(——鎌倉殿の討手が京へ急がれた)

街道のうわさは、軍馬よりも先に、都へ聞えてきた。洛内の庶民は、もう家財を片づけ出した。義経はそれを、仙洞御所せんとうへ参院した戻り道に見て覺つた。

「あわれ、彼等もみな、この義経が、兄に弓引く者と思つているのか。天下、誰あつて、この義経の心を知つてくれる者もない」

彼は、牛車くるまの中で嘆じた。——そう淋しく思う時、ただひとり彼の胸には静しずかのすがたがあつた。



## 五

「京都守護の任にある義経を討たんとすれば、京都は当然兵火につつまれ、ひいては天下の大乱となろう。よろしく彼に先んじて、頼朝追討の院旨いんじを、義経へ下し給うべきである」

おおくらきようやすつね  
大蔵卿泰経

は、九条兼実かねざねや左大臣経宗つねむねや、内大臣実

ねさだ

定ねさだなどを説きまわった。後白河法皇のお心もそこに決しられてあるという。

誰も、誰も、義経の心を知らないのだ。

「京へ、鎌倉の兵を入れるな。尾張美濃の境、墨股河すのまたがわへ馳はせ下つて、義経に、鎌倉討伐の第一箭せんを放たすがよい」

同意は、多かつた。

法皇を繞めぐつて、活澆な策動が初まつていた。——が、何たることか、その頃もう土佐房昌俊らの手勢は、変装して洛内に入りこんでいたのである。

十月十七日の夜だった。

堀川べりの六条室町むろまちの館やかたへ、どつと襲よせて、いきなり火を放かけた軍勢がある。義経は、元より何の備えもしていなかつたし、その夜、郎党たちは、他の所用に出払つて、あらかた留守だった。

「殿つ。夜討ですつ」

佐藤忠信と、四、五の家臣が、大声で広縁から呶鳴つた。ばりばりと火のはぜる音がする。庭木へ螢のような火の粉が散つてい

る。

「今参る」

義経はもう身を鎧よろつていた。静が、側にあつて、太刀の革かわ、鎧よろいの緒おなど、結んでいた。

「忠信つ、忠信つ」

呼び返して、義経は、早口に命じた。

「そちは、築土ついでじを躍りこえて、御所へ急ぎ、火の手に、お案じあらぬよう、義経あらんかぎり、都は焦土とさせませぬと、お取次を以て、聞え上げて参れ。——その足で、出先の郎党どもを集合し、御所を守れ、また市中を警備せよ。義経は、京都守護の任にある者、私邸の火や、土佐房とさのぼうごとき小勢の襲撃は、何ものでも

ない。よいか、急げっ」

云い終ると、静しずかの手から長ながまき巻を受け取つて、義経は、わずかの家臣と共に、表門へ斬つて出た。静は、良人を送ると、母の磯の禅師の部屋へ、

「母かあさま様っ——あつ母様、外へ出てはいけません」

叫びながら馳けて行つた。

矢も、火の粉も、家のなかまで飛んで来た。凄まじい表の武者声に、彼女の母は、耳をふさいだまま、室の外に俯うつつ伏していた。

外出していた郎党や、新宮十郎行家の兵などが、火の手を見て、馳けつけて来たため、土佐房昌俊しやうしゆんたちの襲撃隊は、かえつてはさ挟み討ちとなつてしまつた。

昌俊は、追われて、鞍馬くらまへ逃げこんだが、鞍馬の山僧に捕えられて、二十六日、都へ曳かれた。すぐ首斬られて、その首は、六条河原の秋風に黒ずむまで曝さらされていた。

十一月、洛内の動揺は、もう制しきれないものになつていた。鎌倉の大軍が上ると聞えて来たのである。義経も必ず反撃するものと見てか、頼朝自身、黄瀬川のあたりまで、兵馬を進ませて来たともいう。

「……浅ましや」

義経は、心で泣いた。

夜も寝られない容子ようすであつた。その良人へ、静は、どんなに心をこめて侍かしずいても、慰めきれない思いだつた。——果はては、共に手を取り合つて、

「天下の兵を敵とするも、怖ろしくはないが、肉親の兄へ引く弓はない。およそこの身ほど、骨肉に薄はくめい命めいな者があるうか。襁褓むつきの中より父兄ちちはら弟ちちにわかれ、七ツの頃、母の手からもぎ去られ、ようやく、兄君とも会つて、平家を討つたと思うも束つかの間、兄たる御方から兵をさし向けらるるとは」

「そのお心が、どうして、鎌倉へは通じないものでしょうか。わたくしが兄君様から、弟の妻と、許されているものならば、身を

捨てても、鎌倉へ下って、あなた様のお胸のほどを、お訴えいたしましよものものを……」

ふたりは身も心も一つに悶もだえ合つて、もう大おお廂びさしに木の葉の雨も落ち尽した初冬の夜を泣き明かした。

## 七

風評が風評を生み、今にも大乱と化すように、洛中の貴賤上下の騒こぎが濃くなれば濃くなるほど、義経の心は、誰にも分らなくなつていた。

頼朝よりとも追討ついでうの宣旨せんじは、もう朝議で決定していた。義経の手に

下るばかりになっている。ここでも、彼の心を少しでも知つてくれる者は一人もなかった。

叔父の行家さえ、その策動に、夢中になつていた。義経を押立てて、一合戦のもくろみである。堂上どうじょう、世上の人々が、まったく義経の本心を見失つて、ただ血眼ちまなこに騒いでいるのもむりなかつた。

「最期さいごの日が近づいた。——静、そなただけは、確しかと、わしの心を見ておろうな」

「仰せまでもございません」

ふたりは、密ひそかに誓つていた。犬死する気はないが、そうかと云つて、戦う気も飽あくまでなかつた。その間に処す身支度だつた。



幸いにも、義経の望みは、法皇の御聽許となつた。一先ず九州の地頭じとうとして、都を去ることになつたのである。

——が、人々はなお、彼のそんな柔順を信じなかつた。彼をよく知る九条兼実かねざねさえ、その日の日記に、

(如何ナル騷乱ニ立チ至ルラン。春日明神ニ祈念シテ、何処いずこへモ逃ゲズ、タダ運命ヲマカスノミ)

と誌しるしているほどであるから、京都の市民が、かつての平家が都落ちの時のように、また、木曾義仲きそよしなかが乱暴を働いたように、義経の兵も、存分な狼藉ろうぜきを働いて行くであらうと、怖れ顛おのいてた。

ところが、十一月の霜しもの朝、義経は、赤地錦あかじにしきの直垂ひたたれに、蓆も

黄緘えぎおどしの鎧よろいをつけ、きよう西国へ下るとその邸を出て、妻の静、

その老母、その他、足弱あしよわな者たちを、先へ立たせ、わずかの精

兵を従えて、御所の門前に、肅しゆくとして整列した。

御墻みかきごしに、院の御所を遙拝して、彼は大地へ両手をつかえた。

「義経、不徳のため、鎌倉どのの譴責けんせきをこうむり、今日、鎮ちんぜ

西いに落ちて参ります。思えば、きようまでの御鴻恩ごこうおんは海の

ごとく、微臣の奉公は一つぶの粟だにも足りません。今一度、龍

顔を拝したくは存じますが、武装の甲冑かっちゆう、畏れ多く存じます

れば、これにてお暇いとまご乞こいをいたして立去りまする」

従う人々には、佐藤忠信ただのぶ、堀弥太郎やたろう、伊勢三郎いせなど二百余騎

の家人けにん、みな義経にならつて拝をした。そして、肅然しゆくぜんと、塵ちり

も散らさず、都を後に去った。

——が、摂津、兵庫あたりには、早くも頼朝の軍令がまわつていた。諸国の地頭は、義経を討つて、鎌倉殿の感賞にあずかろうものど争った。

行路の難は、そればかりでなかった。大物の浦から船に乗りこんだ夜、暴風に襲われて、船は難破してしまった。郎党の多くは溺死し、義経は、壊れた船を引返したが、陸にはまた、執こい敵が猛襲してきた。かくて味方とも散々にわかれて後、義経の足跡は、四天王寺までは見た者もあるが、そこを立退いた先は、まったく踪跡を晦ましてしまった。

伊豆左衛門有綱と、堀弥太郎景光という武士二人。

それと、妻の静に、妻の母の磯いその禪師ぜんじと、わずか四人を連れきたきりであつたと、四天王寺の僧は、後で、取調べをうけた鎌倉の武士へ語つた。

## 八

彼は奈良ならに潜ひそんでいる——という噂うわさがあるかと思うと、

(いや、多武とうの峰みねで、それらしい落おち人ゆうどを見た)

とも聞え、

(十津川の筋へ逃げた)

とか、その他、紀州だ、いや、京都の中に潜伏しているのと、

彼の足跡を繞めぐつて、神出鬼没なうわさばかり乱れ飛んだ。

鎌倉勢は、その詮議せんぎに、手をやいた。翻ほんろう弄ろうされているようだった。躍起やつきになつて、探しぬいたが、手懸てがかりもない。

その前後。北条時政の手勢は、何事か、確証をつかんだものらしく、雪ふる中を、吉野の峰へ馳かけ上つて、何の前触れもせず、南院なんいん藤室ふじむろの僧房を襲つた。

「九郎判官ろうぼうがんが、これに潜んでおろう」

「存ぞんぜぬ」

白眉はくびの僧が、応答している間に、彼方の蔵王堂ざおうどうの方で、

「いたつ」

という兵の声が出た。

僧の中で、密告した者がいたとみえる。どやどやとそこへ押入った武者輩むしやばらの中に、その僧も立ち交じっていた。

「やつ……。女と老母のみではないか」

「これは、判官どこの愛あいしよしずか妾めかけ静しずかどのと、その母御の禪師ぜんじです」  
兵を導みちびき入れた僧は云った。

「あ。……静しずかか」

白拍子しらびようしの頃から麗名は高い。舞の上手、またなき容色の持主と、誰も聞いている。わけて、九郎判官が、天下てんかに身を容いれる尺せ地きちもなくなくなった後も、労苦を共にして、連れ歩いている麗人とは、いったいどんな女性かと、武者輩むしやばらは、眼を研とぎたてて、まわりに立った。

母子、ひしと抱き合っているので、一つの大きな繭まゆのように見えた。静しずかのふところに顫わなないているのは老母だった。静は、まわりの刀や槍を、黒い瞳ひとみで、まろまろと見つめながら、母の体のうえに蔽おほいかぶさっていた。

「静つ。——こらつ静つ。……義経はどこへ落ちた。申さぬと、先ず見せしめに、その老おいぼれの首から斬り離すぞ」

「知りません。……良人の行先は、何も聞いておりません」  
「うぬつ」

雪まみれの土足を上げて、一人が蹴とばそうとすると、  
「まあ待て、そう怯おびえさせては、口もきけまい」

と、他の武者が押し止めて、宥なだめ賺すかしながら訊問した。

「これまでは、良人と共に、辛くも辿たどつて参りましたが、深山みやまの雪、母の持病、足手まといと思し召してか、この蔵王堂に四、五日いよ、やがて馬を送りて、迎えをよこすまで——と申されまして、良人とここで別れたまま、先のお行方は存じませぬ」

静のことばは明めい晰せきであつた。その落着おちついた様を見すえて、  
「嘘うそでもないらしい」

と、武者たちは、麓ふもとの北条時政へ、使いを馳はせて、処置の命を待つた。

馬の鞍くらに縛りつけて、すぐ鎌倉へ追い下せとあつた。静は、武者の手に引つ立てられる母へ、自分の上着うわぎを脱いで老いの肩をつつみ、その耳もとへ、熱い息ささやして囁いた。



「ゆるして下さい。不孝をおゆるし下さいませ。わたくしが、世の常の白拍子の<sup>しらびょうし</sup>のように、判官様へ無情<sup>つれな</sup>くあれば、年老いたあなたに、こんな艱苦<sup>かんく</sup>はおかけしなくてもよいのに……私の婦道<sup>みさお</sup>のため……お母様までを、憂目<sup>うきめ</sup>に追いやつて」

## 九

明けて文治<sup>ぶんじ</sup>二年の一月末には、静も母も、鎌倉幕府の罪人として、安達新三郎清経<sup>あだちしんろうきよつね</sup>の邸<sup>やしき</sup>に預けられていた。

氷のような吟味<sup>ぎんみ</sup>の床に、静は、幾たびも、坐らせられた。

「義経の行方を云え」

との巖間である。

清経きよつねは、こう責めた。

「そちのように、情じょうこまの細やかな者が、途中で義経と別れ去つたと腑ふに落ちぬ。どこか、再会の場所を約しているのであろう」

静は、余りに責められるので、幾分、しどろになつて、

「いえいえ、一度は私も、お別れするに耐たえかねて、峰みねの一の鳥居あたりまで、お後を慕したつて行きましたが、女にょにん人の入にゅうぶ峰は禁制きんせいのことに、泣く泣く戻つて参りました」

吟味ぎんみの筆記が、やがて頼朝よりともの手もとへ上げられて来た。頼朝は、それを見て、

「先に、吉野の蔵王堂ざおうどうで、時政が調べ取つたことばと相違があ

る。いよいよ、きび厳しく折せつかん檻して、実を吐はかせい」

と、清きよつね経ねに対して、不機嫌を示した。

清経は、恐きょうく懼くして、さらに、静を辛しんらつ辣らつに責めた。余りに長い時間を冷たい板床にひき据すえられていたせいとか、静は、急に眉をひそめ、蒼あおしろ白しろくなつて苦しげに俯うつ伏した。

驚いて、医師を呼び、薬を求めると、医師は云つた。

「病気ではない。この容体は陣じん痛つうじや」

「えつ。陣痛？」

「ひどく冷ひえこんだため、早めた容よう子すはあるが、はや八月やつきは越えている」

「さては、妊娠していたのか」

清経は、息を嚙のんで、先頃から自分のした折せつ檻かんが、ひそかに今は自分を責めた。

何しても、騒ぎとなつた。しかし、案外に産室へ入つてからは軽くすんだ。産れた子は、男であつた。初ういざん産だし早目でもあつたせいか、ふつうの嬰あかご児より小さかつた。

「お母様、見てください。似ておいで遊ばすことを……。このお眼、このお唇くち」

彼女はこの邸が、獄ごく舎しやであるのも忘れて、搔かき抱いだいては、欣よろこんだ。——お見せしたい、一目でも、かの君にと。

木々の芽めもふく春に向いて、嬰あかご児の手足は、日ごとにまろくなつて行つた。父の血をうけて、この子も意志強い容か貌おだちしていた。

「ああ、お目にかきたい。それにしても、わが夫つまは何処どこの野路を……？」

思うにつけ、胸が傷む。すると怖ろしいほどすぐ乳ちちが止るのである。嬰兒あかごは泣く。——せめてこの啼なき声など、良人の耳みみに届とどくすべもないかと、また、涙なみだに溺おぼれてしまう。

「ちツ……。うるさい餓が鬼きだ」

昼夜、室の外とちに、番ばんをしている詰つめ侍ざむらいが、時々、聞えよがしに、舌打しつうち鳴ならした。

築地ついでの外の桜並木さくらなみぎが、枝もたわむばかり咲さき誇こってきた。夜も昼も、そこからチラチラ白いものが母子おやこの室むろへ散り迷まつて来た。

嬰兒あかごは、眸ひとみをうごかしぬく。もうお目が見えるそうなど、老母

は、その生命いのちの育ちをむしろ儂はかなげに眩つぶやいた。静は、花の散るのを見たと、吉野の雪の日が思い出されてならなかつた。——別れた人のうしろ姿に、霏ひひ々と雪ふぶきの吹いていたその日の別離を。——幾たびも振ふりむ向いては去つた彼の君の眸ひとみを。遂には、雪の中へ泣き倒れて、雪に埋もれていた自分の姿を。

## 十

四月の一日であつた。

もう桜も若葉だつた。散り消えた花の影が、何か遠い過去であつたような心地のする朝。

「折入つて、静どのに」

と、いつになく丁寧ていねいに、安達清経あだちきよつねがはなしに來た。

「ほかでもないが、この四日、頼朝公には夫人おくがたの政子まさこの方と御一緒に、鶴ヶ岡に御参詣がある——」

そう前提まえおきして、清経は、頼朝の命めいとして、次のような事を伝えた。かねて頼朝にも、弟の内縁の静が、神泉殿の雨乞あまごいの舞樂に、九十九人の舞姫のうちでも優れた白拍子しらびょうしであつたといふことは聞き及んでいるところから、

（四日はちようど参詣のついで、ぜひ社殿の廊ろうにおいてなど、隠れなき上手の舞をよそながら見たい）

という熱望だといふのである。

捕とらわれて、鎌倉へ送られて来たその当座にも、早速のように、舞を見せろという頼朝の下命はあつたのである。——が、静しずかは、どうしても、かぶりを振きつて肯きかなかつた。

手を焼いた前例があるし、こんどは、頼朝のいいつけも、嚴重であつたから、清経は、この下した話ばなしには、充分しゆうとう周ちゆう到とうな要意を胸に持つて、彼女を説いた。

「いちどお目にかかつておけば、お怒いかりの度もよほど和なごもう。舞だに終つたなれば、老母をつれて、京へ帰るもさしつかえないとまで仰せられてある。御老母のためにも……ここ忍しのぶべきところではないかな」

母のために。



そう云われると、否いなむ言葉もなかつた。また、良人の義経に対する鎌倉殿の感情が、すこしでも解けてくれたらと、静しずかは、そうした恃たのみも抱いて、

「まだ、良人の生死も聞えず、別離の涙もかわかぬ今、恥かしい身を、鎌倉殿のおんに曝さらすのは耐えられぬこちがしますが、あわれわが夫つまへの、故なきお怒りが少しでも解とかれたなら、どんなに欣うれしゅうございましょう。恥を忍んで舞に上がりましょう」

恥うらみ、怨うらみ、無念——あらゆる胸むな揺ゆらを嚙のんで、きつと、決意をした唇から、静は、遂にそう答えた。

その日、清経きよつねに伴ともなわれて、静は、頼朝よりとも夫妻の前に出た。――

――初めて、実にきよう初めて、わが良人と血をわけている兄なる人と、あによめ 嫂の君とを見たのであった。

ぶでん 舞殿の東側ひがしわきの一段高い席に、頼朝と政子まさこは居い並ならんで彼女を見た。夫妻は、物珍しいものでも見るように、静のしとやかな礼儀を見まもっていた。

「思ったよりは、やつ ※れてもいない。なかなかきじよう 気丈きじよう そうな女子ですこと。――何か、お言葉をかけておやりなさい」

政子まさこに囁ささやかれて頼朝は初めて云った。

しずか 「静しずかというか」

「……はい」

「幾歳になつた」

「はたち二十歳になりました」

「二十歳……ほう」

夫妻は、顔を見あわせた。何の品しなざだめ評ひやうをしているのか、静には、その心が酌くめなかつた。

「愚おろかよのう。まだ年としばえも二十歳を越えず、世に隠れない舞の手も持ちながら、何で、九郎冠くわん者のようらうかじやな、埒らちもない男を恋い慕うぞ。……ははははは、酔すい狂きやうな女子よ」

静は、水のように、冷やかな感情になつた。この良人の肉親は、またその妻である人も、自分を、弟の妻とはまったく視みていない

ことがよく分つた。飽くまで白拍子あがりの遊び女と遇ぐうしているのである。

(なんで、こんな人に憐あわれをすがるうぞ)

彼女は、唇くちをかんだ。愍あわれを乞う者と誤られるのも無念である。涙もこぼすまい。頭も下げまい。

屹きつと、彼女は、胸を上げた。——そしてむしろ愍あわれむべき二個の人形よ！ と頼朝夫妻を、その情熱の沸たぎりを持つ黒い瞳ひとみで、じいつと、眼も外らさず見つめていた。

「舞え。——起て」

頼朝は、急せいた。

「はい」

静は、きりつと答えた。水色の水干すいかん、真紅しんくの袴。——起つて、頼朝の夫妻を、高くから見て微笑んだ。

「わたくしの、好きな歌舞でよろしゅうございますか」

「何なりと」

夫妻は共に頷うなずいた。

鼓つづみの上手、工藤左衛門尉祐経くどうさえもんは、はや一拍子ひとびょうし入れて、此方なたへ眼を向けた。銅拍子どびょうしは、畠山庄司重忠はたけやましやうじしげただ。——静のすがたを、祐経と挟はさみ合つて、床ゆかを取つた。

遠く——遠く——静は眸ひとみをやつて、なお、舞い出さなかつた。

恍惚うっとりと、鶴ヶ岡のここの高さから空を見ていた。行く雲を見ていた。

「ぎっ！」

鼓、銅拍子、気を合せて、舞のきツかけを促うながした。——と、空  
 ゆく雲のそれのように、静の水干すいかんの袖が瑤々ゆらゆらとうごいた。美  
 しい線を描いて舞い初めたのである。

よしの山 峰のしらゆき

ふみわけて

入りにし人の

あとぞ恋しき あとぞ恋しき

眼にはいっばいな紅涙があつた。けれどまた、その眼には頼朝  
 もない鎌倉幕府の権けんりよく力もない。

元より上手に舞おうなどは、みじん思つてもみなかつた。た

だ祈るのは、この舞が、良人の恥辱にならないことであつた。義経の妻として世の物もの嗤わらいとなるまいとする懸命だけであつた。

しずやしず

賤しずのおだまき　くり返し

むかしを今に

なすよしもがな

——なすよしもがな

歌い終るのと一緒しよであつた。彼方かなたの頼朝夫妻の席で、断きつて落したように、ばらりツと、簾れんが落ちた。——その簾れんちゆう中から洩れる怒りの声だつた。

「八幡の御宝前ごほうぜん、しかも頼朝が前なるも憚はばからず、叛逆人はんぎやくにんの

義経を、明らさまに、恋い慕つて舞い歌うとは。——ゆるせぬ女、

余よを、余を、小馬鹿にした舞ではある！」

「あなたの御不興ごふきようは、お身勝手というものです」

そうたしなめているのは夫人であつた。

「何が身勝手か」

「流人るにんとして、伊豆の配所けいじょにおいて遊ばした頃のことを考えてご

らんなされませ。私は、静の歌を聞いて、女子おなごはやはり女子よと、

思わず眼がうるんで来ました。……私が、配所にあるあなた様を

お慕したいして、闇の夜、雨風の夜も、通かようた頃の心を思い較くらべると、

かの女子おなごの今はさこそと察しやられます。このようなことに、席

を蹴くつて、御不興のままお帰りなどなされたら、坂東武者ばんどうに、



あなたの鼎かなえの軽けい重ちゆうを問われましようが」

政子は、かえつて、機嫌きげんよかつた。静をさしまねいて、卯うの花がさ重おんぞねの御衣おんぞを、きよようの纏はなむけ頭づとぞと云つて与えた。

静は、舞が終るとすぐ、わき見もせず、清経きよつねの邸へ歸つた。——そして馳かけこむように、乳ちを待つわが子の部屋へ這入つたが、わが子は見えなかつた。

「……和子わこよ。和子よ」

老母の答えもない。いや、灯とも火しびもない一室の隅に、磯いその禪師は、喪心したようにすすり泣いていた。

「和子は、どうなさいましたか。——お母様、わたしの和子は」

「……………」

老母は、ただ泣いて、遠い海鳴りのする夜空を指さすばかりだった。

「——げっ。では……では和子さまを」

「武者たちが、海のほうへ、引つ攫うて行つた。——鎌倉殿のおいっつけじやと」

## 十二

水と空の界だけが、ぼつと夜明けのように明るいただけだった。夜の海は、真つ暗に吠えすすさんでいる。常でも浪の激しい由比ヶ浜に、こよいは風がある。

「和子ようつ。——和子ようつ」

痛む乳を抱きしめた水干すいかんの舞姫は、沖へ向つて声をからしていた。浪に漂ただよう木片あくたや芥あくとを見ては馳けて行つた。しぶきを浴びて、走り狂つた。

松明たいまつを振つて追つて来た人々の中に、安達清経あだちきよつねもいた。わが子の後を追つて死のうとする静しずかを抑えて、遮しや二無二むむ連れ歸つた。一夜に、瘦やせ衰えた舞姫は、その夜から嚙うわごと言ことに、子と良人のことばかり云いつづけて、夏の中も病とこの床から起てなかつた。

静が、気がついてみると、初秋はつあき八月の風が萩はぎ叢むらにふいていた。笠かさと杖かきとが手にあつた。老母と共に鎌倉を立つ日であつた。

「良人は何処に？」

生きるかぎり、彼女は思いつづけたであろう。また、果てなき道歩いたことでもあろう。——私たちが旅にふと見る、名知らぬ路傍の草の花叢はなむらは、そこが彼女の足が止つた最期さいごの地であつた墓標しるしかも知れない。

彼女の咲かせた情操の姿は、野の花に見るあんなふうじゆんに、またなく純じゆんで飾り気もない愛だつたから——。

# 青空文庫情報

底本：「剣の四君子・日本名婦伝」吉川英治文庫、講談社

1977（昭和52）年4月1日第1刷発行

初出：「主婦之友」

1940（昭和15）年5月<sup>14</sup>

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：雪森

2014年8月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 日本名婦伝

静御前

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫  
著者 吉川英治  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>